

療育とは、あらゆる科学と文明を駆使して……

「天上の星か、地上の星か」のように迷いもあり、元院長に意見を伺った。早速、ご返事をいただいた。

その中に、支援費制度のように「本人（時に家族）が、自分で道を選択するようになっていますが、現状は受け入れ施設があるか、無いかの問題」であり、また、「コ・デイネ・タ・がいて、相談にのることになっていますが、やはり一人一人の障害児の障害と成育歴とを見きわめて、一人一人に合った生涯プランが必要で、これは本人、家族には無理で、複数の専門家がディスカッションを重ね、また実施してみて（本人、家族をまじえて）決定するものだと思います。」とあった。

この、本人、家族を含め、複数の専門家がディスカッションを重ねて、ケアプランを作成する地域のシステム作りは、かねがね私も頭の中で構想しているものです。元院長の弟子と自ら勝手に自認している私だけに、当然と云えば当然だが、考えていることは同じ！とつくづく思った。

こうしたシステムを願うだけに、当 HP でも触れている似非プロのことを見聞すると、つついコメントしたくなってしまふ。また、こうした似非プロの現状からして、システムの実現は何世代後のことか……。

ふと思うのだが、障害児対象のプロって、あり得るのかなあと思う。発想を転換し、障害児と係わる側も人間、対象者も人間。お互いに感情のある人間だけに、 $1 + 1 = 2$ とはいかない。プロはあり得ない、また自分の専門分野だけでは力量不足が当然と思えば、必然的に、お互いに専門的見解を交換し、輔け合おうという共通認識が芽生え、システムは構築し易いのでないかと思う。

「療育とは、現在のあらゆる科学と文明を駆使して障害児の自由度を拡大しようとするもので、その努力は優れた『子育て』でなければならない。（高松鶴吉）」ということから考えると、各専門家がこうした認識で協力し輔け合えば、現在でも、本人（家族も含め）は、安らぎを感じるはずなのだが……。

一方、いくらこうしたシステムが構築されたとしても、本人（家族も含め）達の真の安らぎは、当 HP でも何度も触れているように、成熟した福祉社会になることが必要なことは云うまでもない。

（2003年03月23日記）